

コメント 2

千葉大学工学部 准教授
岡部 明子

岡部です。まず、倉阪先生に、大変コンパクトに話をまとめていただきまして、ありがとうございます。私の担当部分について、多くの資料は、国土交通省の、私がたまたま委員をしていたところで知った資料をベースに私が考察しているものです。いかにも独自の分析のように言われるとちょっと歯がゆい思いをいたしました。

倉阪先生の説明にありました私の担当部分は、マクロ的な国土政策の観点から、これからの社会全体がどう展開していくのか、南房総地域にズームアップして考察したものです。他方、建築まちづくりの分野では、足元のコミュニティ再生が大きな課題になっています。コミュニティの現実と対峙し、ミクロなアプローチが欠かせません。ところが、実際に私自身、そんなコミュニティと言えるようなところで育ったわけではありませんし、研究室にいる学生もまたそういう経験がありません。何か身体で覚えるようなことをしないと、これ以上考えても机上の空論で、どうどうめぐりしてしまいます。そこで2年ほど前から館山市をフィールドに、商店街や半農半漁の集落で、実践的な活動を行い、それを通じてコミュニティについて多くのことを学ばせていただいています。本日は都市計画課の石井課長にお越しいただいていますが、館山市さんには、おそらく何をしたいのかよくわからないようなことを、いろいろ提案し、ご迷惑をおかけしてきたことと思います。やっと少しは認められてきたのかなとは思っておりますけれども。



写真1 葺替え前



写真2 葺替え後

その一つで、きょうの倉阪先生のきれいにまとまった話を、「では、現実の場に置くと」ということで、私がかやぶきの家で行っている——どちらかというとな研究室の学生たちが中心ですけれども——活動を、今日の話になぞるような形でお話ししたいと思います。

人工資本から考える人口減少

私の専門は建築・都市分野ですので、当然ながら、今回のブックレットでも私が担当しましたのは、人工資本のことで、きょうは人工資本、人的資本、自然資本、社会関係資本という4つの資本が出てきましたが、私にとって核にあるのは人工資本です。人工資本の一つとして、建物があります。その中で古い民家、かやぶきの民家というのを、人工資本の一つの象徴的な題材として取り上げ、考えてみたいと思います。

このようなかやぶきの家です（写真1）。一見、かなり傷んだぼろぼろの民家です。私がかやぶきという事で取り組み始めたときには、地元の人たちも、金持ちでもないのに一体何をやろうとしているんだという、半信半疑な目で見られました。ほとんどいつ崩れてもおかしくない屋根でした。今年（2011年）の秋に何をしたかといえば、一番問題のある、雨漏りがしてどうにもならない、ここが壊れるともうおしまいだということだけ最低限直しました（写真2）。純粋にハードの建物としてみれば、それだけのことです。

最終目標はこういうふうにきれいにすることなのか、と誰もが思いますね。これは実は、私たち、学生も一緒に手伝った近所の民家の例なのですが、全面的に茅をふき替えたものです。でも「これが目標ではない」のです。こんなふうに「散髪したての、おろしたての、きれいさっぱり茅葺き屋根」にすることが目標ではなくて、「人口減少・環境制約下で、持続部門で回る地域社会のしくみを探る実践」なのです。そう言い切るのはちょっとやせ我慢なところがあるのですが、やっているうちにだんだんそんなふうに見えるわけなんです。

人口がどのように国土に貼り付くか

人口減少・環境制約下に持続できるコミュニティ形成と題して、きょう倉阪先生のほうから人口減少の問題と環境制約の話と両方ありましたが、私自身は国土計画的視点から人口減少を軸にこの問題を見ようと思います。どういうことかといいますと、人口が減るにあたり、一人当たりの環境負荷がそのまま保てれば、環境負荷は自動的に減るわけです。そこで、一人当たりの環境負荷を増やすことなしに維持し、一人ひとりの豊かさというものがうまく回っていく社会にどうすれば導くことができるのか、という課題を設定します。

必ずしも成長を前提としないという話が先ほどありましたけれども、一人当たりの経済活動量が変わらず、人口減少すれば経済はマイナス成長になりますね。他方、今まで拡大成長していた時代には、国総体としての豊かさが、イコール一人ひとりの豊かさだったわけです。それが、人口減少局面になると、国総体の豊かさと一人ひとりの豊かさが、大きく乖離してきます。そのときに、どのように国土に人口が張り付いていけば、環境面と人口減少という問題をクリアして豊かさを維持できるかということになってくるわけです。これはマクロ的に見れば、きょうの話ですとコンパクトになっていたほうが良いというようなことが、一般論としては言えるということになります。

人口減少に関しましては、最近、特にヨーロッパからの関心が非常に高くなっています。そのきっかけになったのが、2010年の、ちょうど1年ほど前

に出た『エコノミスト (*The Economist*)』の記事 Into the unknown (2010年11月18日)ではないかと思います(編注:本記事のURLアドレスは以下。<http://www.economist.com/node/17492860>)。これ以降、いろんな方から問い合わせを受けたり、取材の話があったりします。今日は、震災被害の大きかったところで例として、人口減少の見通しについてお話ししたいと思います。沿岸の津波と原発の直接影響を受けた市町村の人口は250万人ぐらいなのですが、これが2050年の長期展望では、国交省が出したデータによると100万人ぐらい減ります(図1)。手前に書いてあるのは高齢化率でして、45%まで高齢化率が上がるというものです。

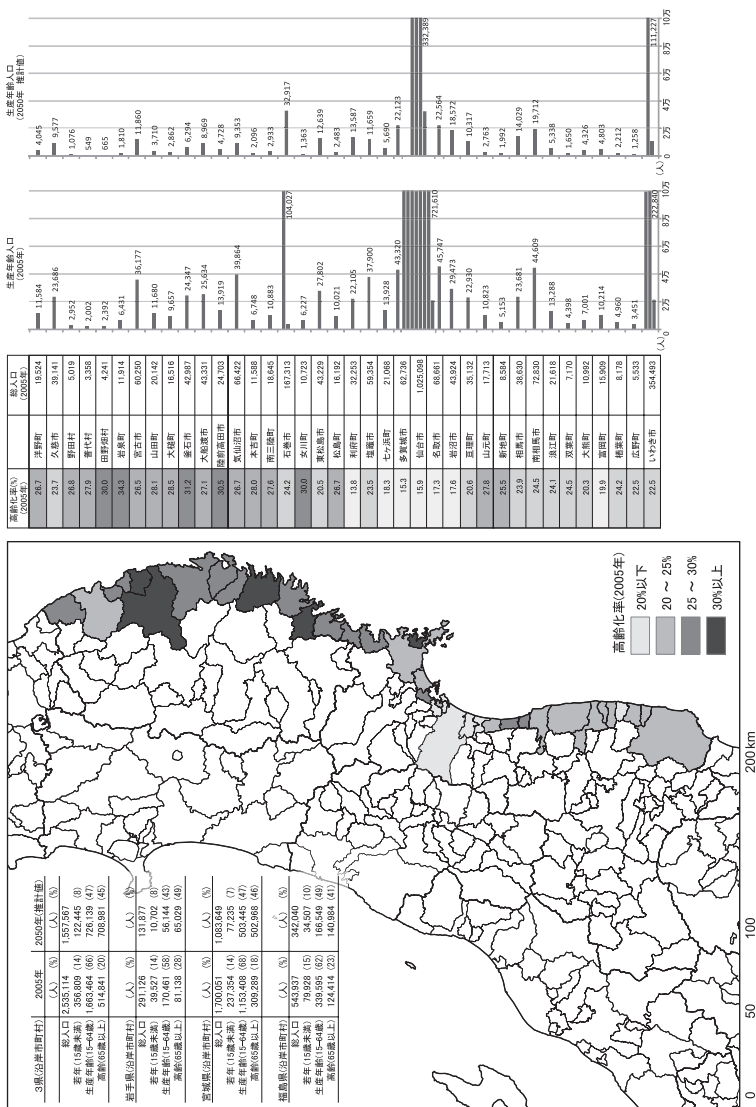
これは一体どういう状況なのか。そういうことを見据えて復興していかねればいけないのではないかと私は提言しています。これがどういう事態なのかというと、右側に描いてあるグラフは、それぞれの沿岸自治体の生産年齢人口の数です。色は高齢化率です。濃いところほど高齢化率が高い。薄いほど高齢化率が低いということです。これをみますと、エリア的に差があり、かつトータルで見ると日本の平均的な高齢化率です。報道では過疎の漁村のことが多く取り上げられていますけれども、平均すれば、日本の平均と同程度と言えるわけです。

年齢3階級別の人口構成を考慮しますと、生産年齢人口は半分以下に減ります(図2)。下の数値が高齢者数ですが、生産年齢人口は半分以下に減って人口が100万人ぐらい減るのに、高齢者は20万人増える。これも日本の縮図です。これが人口減少の厳しい現実です。

しかし悪いことばかりではありません。一人当たりの環境負荷を維持していけば、人口が減るので、これをハッピーに考えれば、環境負荷は半分になる。どうやったら維持できるか問題は別ですけれども、それが叶えば、半減する。

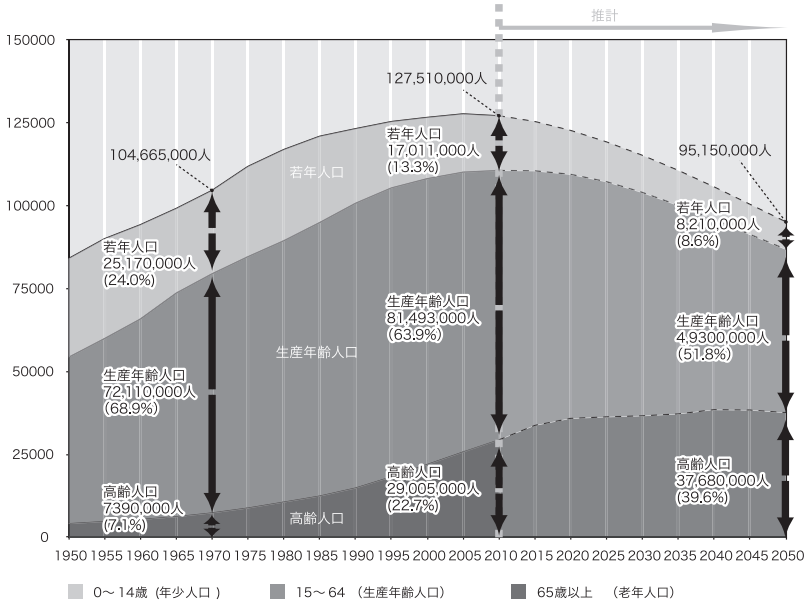
生産年齢人口72万人、高齢者人口71万人、つまり、両者がほぼ同数いる社会になります。どのようにすれば社会のしくみが回るか。今日お話があった成長部門と持続部門の経済がそれぞれ半々、そんな経済が何となく想像できる

図1 沿岸の津波と原発の直接影響を受けた市町村の人口



(出所) 国勢調査結果、国土交通省国土計画局による市町村別将来人口推計データをもとに作成。

図 2 総人口の推移



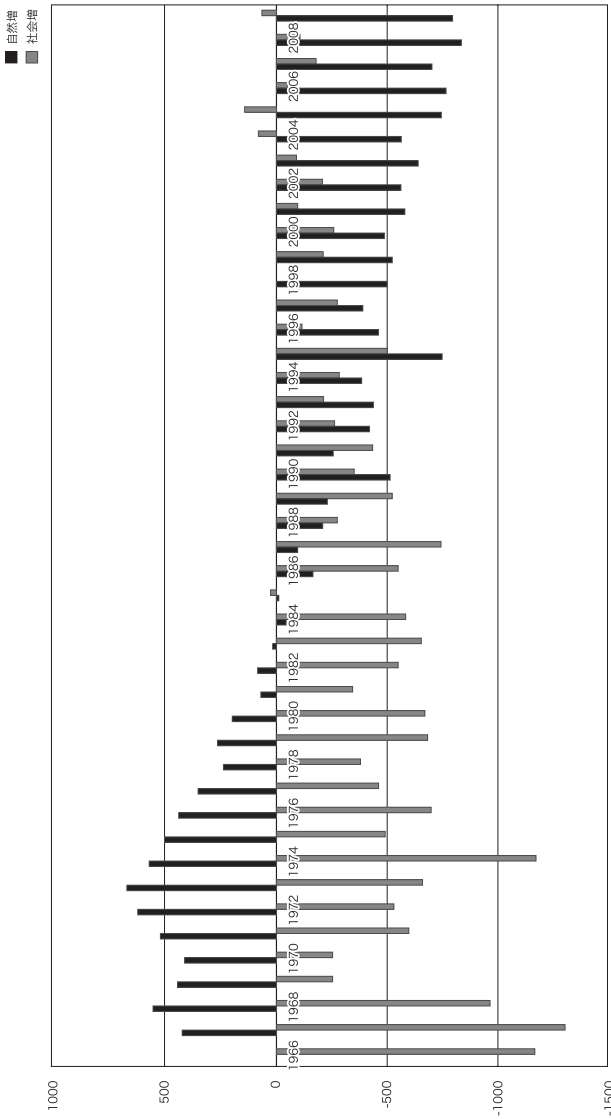
(出所) 総務省「国勢調査報告」、「人口推計年報」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」における出生中位（死亡中位）推計をもとに国土交通省国土計画局作成。

のではないかと思います。

「供給制約型」という考え方

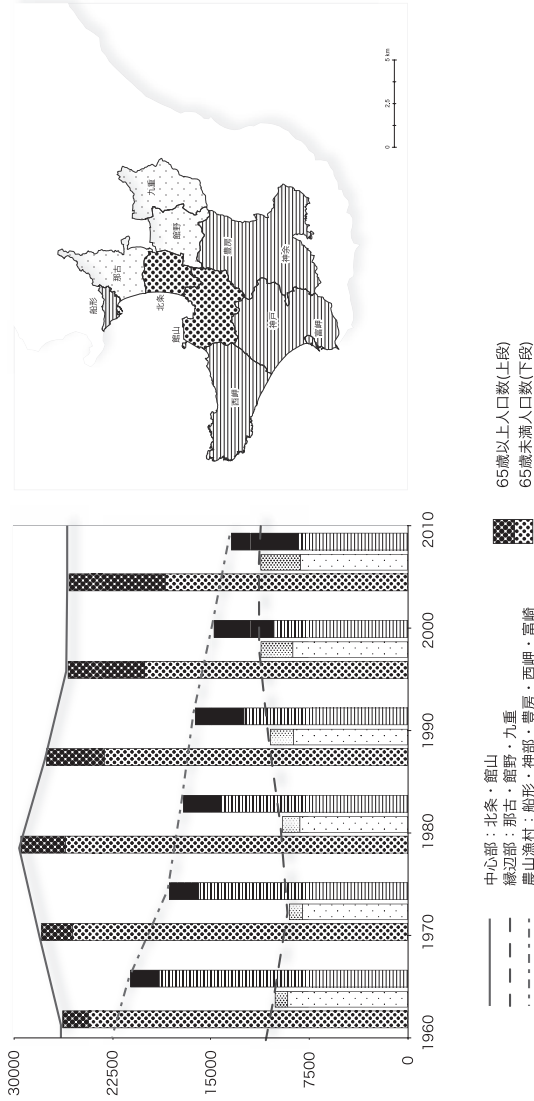
そこで、もう一つキーワードとして出しているのが、「供給制約型」という考え方です。先ほど倉阪先生の話では「宇宙飛行士経済」と言っていたのがまさにこれです。今までは需要を拡大することによって、それを満たすことで豊かにしてきたわけですが、逆に供給される量で制約されて社会を創造的に回していく。ということは、産業の構造としてはどうなるのかということ、総ケア化というか、半ケア化と言うべきかもしれませんが、ケアの経済に大きくシフトしていくことが容易に想像できます。このように、人口減少・環境制約

図3 館山市都市圏の人口減少推移 (自然増減、社会増減; 1966年-2008年)



(出所) 総務省「国勢調査」をもとに岡部研究室作成。

図4 館山市の地域別（中心部、縁辺部、農山漁村部）人口推移（1960年～2010年）



(出所) 総務省「国勢調査報告」を元に作成。

下の近い将来を想像すると、価値感、経済価値も大きく変わります。持続部門のシェアが拡大するということは、同じものでも、継続的なケアがなされているか否かで価値が大きく異なってくると考えられます。

館山市の人口減少の特徴

このように、人口減少・環境制約下、2050年の日本の平均的な地域社会の姿をイメージしていただいたところで、館山市を中核とする南房総地域にズームアップしていきたいと思います。

南房総地域では、2005年比で2050年には人口が半減します。館山市雇用圏で10万人がほしい5万人になるぐらいです。この地域は、戦後一貫して人口を減らしてきました。図3は、1966年からの、館山市のみの人口動態です。黒色が自然増減で、灰色が社会増減です。1980年代半ばまで、社会減が自然増を上回り人口減少していたのに対して、近年では社会増減は安定し、人口減少の主要因は自然減となっています。このように、減少の内実は変わってきているのがわかります。これは、倉阪先生の最後の政策の「たなおろし」のところ、4つの資本のたなおろしで政策の方向性というところで、人口増減に対してどういう評価基準を設けるかという話と接点があるかと思っています。

また、館山市内でも、エリアによって大きく人口構成比が違ってきます。冒頭にお見せしました「かやぶきの家」は西岬という地域に位置します。図4では、農山漁村の一地域に相当し、高齢化率は30%を超えています。同図で縁辺部と分類したところでは、3本のグラフの中央ですが、人口が少し増えているところもあります。

私たちの研究室では今、ここ数年来、まちなかと里の両方で、実践的な活動をしています。まちなかではカッチュウビルを昨年度集中的に、今年度は里の「かやぶきの家」が本格始動しました。きょうは「かやぶきの家」のほうのお話をしようと思います。

持続的なケアが大きな価値になる

場所としては、里海・里山に恵まれたところですが、まず、この建物自体を人工資本ととらえてみましょう。かやぶき民家というのは、今のメンテナンスフリーの建物と比べて、極めて世話のかかる、手間のかかる建物です。ですけれども、持続的にケアされていることを価値とみなすならば、かやぶきの家というのはものすごく大きな価値を持つのです。ずっと継続的にケアをしていかなければならない。「茅葺屋根は、何年か一度に、一部を補修して、ぐるっと回ったときにはまた元のところを補修しなければいけない」と、かやぶき民家を持っている方は皆さん、ため息まじりにおっしゃいます。「毎年のようにかなりのお金がかかってとてもやり切れないので瓦に替えた」というような方がかなりいらっしゃいます。

材料の茅が手に入りにくいという問題もあります。私たちの場合は、大家さんが数年がかりで刈りためた茅が多少なりともありました。正直、私たちが世話をしている「かやぶきの家」の屋根の状態は、全面葺き替え相当に傷んでいました。しかし、ここは、供給制約型で人工資本をメンテナンスしていくという発想です。つまり、「既にある茅のできることをやる。次にまた刈りためたらまたできることをやる。そのことによって継続的なケアをすることにより価値を高めていく」。そしてやっとほんとに価値になってきたかなと思うようになってきています。こういう発想は、実践と並行して具体化してきたのが現実ですけど。

これは、もちろん人工資本のケアという意味でも価値なのですが、継続的にケアが行われ、しかも、みんなの家としてケアして、地域の高齢者、特に一人暮らしの男性の方なども、ここに居場所を見出して、裏でたき火をして始末をしてくれたりとか、魚を釣って持って来てくれたりというような、社会関係資本のケアにもつながっています。高齢者の未病、元気でいつまでも暮らしていただけるには、居場所がカギになりますから、そういうことにも実際つながったのではないかと思います。

もちろん人的資本で忘れていけない教育という意味でもある。学生たちの教育の一環でもあります。これは、学生たちの活動のブログとしてつくっているものから取ってきたものです(写真3~5)。成長部門から持続部門へ移行しつつある社会を担っていくとはどういうことなのか、身体を動かすことを通して、考えてくれていると思います。

先ほど倉阪先生が説明された図(18ページ)でいえば、小さな自治体では、比較的、対世帯当たりの事業所数が多い。ということは、昔ながらの小さな事業所が多いということです。ですから、新築でなければやっていけないビジネスのスタイルになっていなくて、メンテナンスでも回っていく、コミュニティビジネスでも何とか回し得るといふ潜在的可能性があるのではないかと思います。

写真6は「かや談義」です。手間のかかる茅屋根をどうやって直していこうか、専門家をお招きして、地元の方、移住された若い方々などと一緒に話し合っています。写真7は「かや茶会」。地元組織を通じて声をかけたのでは、どうしても男性の方しか出てきてくれません。そこで、地元の女性の方に参加しやすい場をつくって、多くの方と知り合いになれば、とお茶会をやってみました。まずはお茶会に来ていただくことによって、今度は畑で取れたものを差



写真3~5 (上から)
作業する岡部研究室の学生



写真6、7 かや談義



写真8 かや茶会

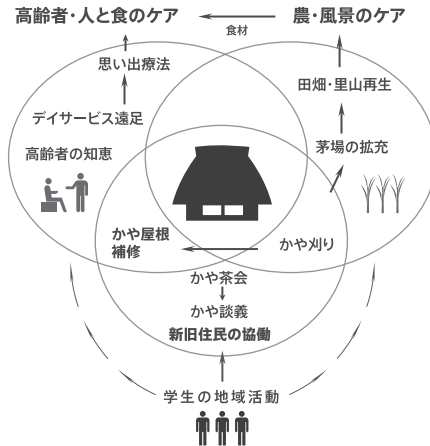
し入れしてくださるとか、少しずつ展開が出てきています。社会関係資本が育てる場かなあ、と思っています。

「かやぶきの家」を核とした実践から見えたこと

図5は、「かやぶきの家」を中心とした活動を概念図としてまとめてみたものです。「かやぶきの家」という人工資本をコアにしています。今日は、人工資本と社会関係資本とのつながりを主にお見せしました。

こうして実践的に動いていくうちに、だんだんいろいろなことが見えてきました。館山市というのは伝統的に保養地であったために、明治・大正期から小さな医院が多く、医療機関の充実した場所です。また、鴨川に亀田病院がありまして、高度医療にも恵まれています。高齢者、人のケアのほうへの展開が考えられます。両隣の部落にはデイ

図5 トータルケアの「海辺の里」



(出所) 岡部研究室作成。

サービスと高齢者福祉施設があります。何かうまく持って行きたいなということは前から思っているのですが、まだ何も動き出していません。

もう一つは自然資本のケアです。私もかやぶきの民家と付き合っはじめてわかったことですが、茅というのは、自然の風景のケアにつながるということです。山裾の茅場は毎年刈ると、またきれいに茅場が再生するわけです。一手間だけかければ、肥料も何も入れなくても、茅場というのはまた茅を再生してくれる。その茅を最初は断熱材に使い、一冬越したら、次は屋根をふいて、古茅は畑にすき込んで肥やしになる。という循環が里山・里地・里海のある風景のケアにもつながる。集落のほとんどがかやぶき民家だったころは、集落コミュニティで茅場を維持し屋根を葺く茅材を持続的に確保してきたといいます。茅が、里に広がる畑、かやぶきの家、コミュニティ、自然資本、人工資本、社会関係資本の全体をケアの循環でつなぐ一つの糸になっているというようにしくみが人びとの暮らしを支えていたのです。まだそこまでいっていませんが、古茅を使った本当の農地の再生などもやりたいなと思いは広がっています。

今年は、震災があったことの影響もあるのですが、茅屋根の一部葺き替えの取材に来られた方にも、学生たちだけでなく地域の方々がとても楽しそうに参加されているということが印象に残ったようです。「絆」という言葉が好んで見出しに使われました。今年のトレンドかもしれませんけれども。人工資本と社会関係資本が一体的にケアされている。そうした姿が「かやぶきの家」にある。

先ほどの話に、コミュニティの中心としては小学校や病院などがあり得ることがありましたが、施設計画的には確かに小学校などが適しています。ただ、こういう実践を通して思いますことは、既存の建物を直すプロセスをみんなでやっていく、そういう持続的なケアが行える、いつもケアが必要な場がある、そこそがコミュニティの中心に自然になっていくというような気がいたします。小学校も、昔はそうでした。みんなそれぞれの専門性を持った人たちが学校の直しをしたり、フェンスを直したり、ペンキを塗ったりして、みんなでケアをしてきたがためにコミュニティの中心になってきたわけです。それと同じような形ですね。何か既存の、建物でなくてもいいのです、畑でもいいのですが、持続的にケアしているところに価値があり、それがコミュニティの中心になっていくというような像がだんだん見えてきたような気がします。

以上、南房総地域での実践に引き付けて、倉阪先生のお話を受けての私のコメントを終わらせていただきます。